

「さぶろうと三瀬」

名瀬市立崎原小学校 五年 野畑 賢士

夏の早い朝、さぶろうは崎原の高台に立って広い海を見つめた。いつか海のかなたのネリヤカナヤに行つてみたいと考えていた。さぶろうは今年で十才になる。さぶろうは、ネリヤカナヤの手始めに三瀬に行こうと思つてゐる。三瀬は高台から三十キロメートルはなれたところにある。じいちゃんは、「そこでは、つつてもつつてもなくならないほど、カジキがつれるんじやよ。ホッホッホッ。」と話していた。さぶろうは今、カジキづりに興味をもつてゐるのでちょうどよかった。

ある日、じいちゃんたちが名瀬の弟に会いに行くことになった。それもつまりこみというではないか。さぶろうは、このときだと思つた。

「じいちゃんがいないときに船をかりて三瀬に行こう。」

昼になってじいちゃんたちが名瀬に出かけた。さぶろうは、さっそく準備を始めた。カジキのエサのうるめつり用の糸まき、カジキつりのノウ糸、つり道具箱、

「準備かんりよう。」

そう言つて、外を見るともう夜だ。さぶろうは、ねることにした。

「明日が楽しみだなあ。」

と言つてねむつた。

次の日の朝三時、さぶろうはおきていた。はがまからはんをとりにぎりをつくつてゐる。具は、らっきよ、みそ、どうやら、今日のべん当を作つてゐるようだ。朝の四時になった。さぶろうは、つり道具をヤボにさしてかついで家を出た。そうしてマンドマリまで歩いていった。海につくと船おき場から船をとつた。

さぶろうは、とうとうたった一人で海に出た。船は手こぎの船だったので、一生けん命こいだ。じいちゃんと漁に出たことは、しよつ中あつたが何から何まで一人するのは、はじめでつた。リーフをすぎると心臓がドッキンドッキンしたが、もうあとへはもどれない。三時間ほどして、やっと三瀬についた。もう昼の十二時だつた。さぶろうは、じいちゃんからきいていたつり場に碇をおろした。

さっそく、カジキつりのエサに使つるうるめづりを始めた。

「それっ。」

と言つて、サビキ糸を海になげた。だが、なかなかつれない。しばらくして、潮の流れが南にかわるとうるめがどんどんつれだした。

いよいよカジキづりだ。いけすから生きのいいうるめをいびきとつて、その鼻づらにでかいカジキ用のつりばりをひっかけた海になげこんだ。うるめはぐんぐん泳いでいった。そして二十ぴろの糸をながしこんだ。カジキの力は強いので太

いさおに糸をまきつけて船のさお立てに差し込んだ。五、六分待った。何もこないのべん当にした。

じいちゃんがやっていたように、うるめを一匹、三枚にさばいてサシミをつくり、酢としょう油をぶっかけて、口におぼった。

「うまい。」

おにぎり、らっきょう、みそをむしゃむしゃ。

「ううん、おいしかったなあ。」

と言いながら食べた。食べ終わって、竹ざおからノウ糸を外し、右手に持とうとした時、ノウ糸がものすごい速さでサーツと海に流れて行った。糸のまさつでさぶろうの右手は、熱く切れそうになった。さぶろうは、糸をはずすと同時に手ぬぐいをすばやく右手に巻きつけて、ノウ糸をにぎった。手に力を入れて、流れる糸を止めると、さぶろうの体は、海に引き込まれそうになった。あわてて、左手で船のへりをつかみ、両足を船べりに立てて、つな引きのようにしてふんばった。すると、船が大きくかたむき、右側から水が入り出した。また、あわてて、ノウ糸をゆるめて海に流した。十ぴろぐらい、ノウ糸のにぎりをきつめにして流した後、また、ぐつとうでに力を入れ、両足をふんばった。すると、今度は、船が後ろ向きにぐんぐん引っぱられていった。碇づながピーンと伸びて船が止まった。二分くらいそのままの状たいが続いたあと、さすがにカジキも疲れたのかノウ糸がゆるんできた。さぶろ

うはす早く、ノウ糸をまき取りにかかった。このままいっきに引き上げるぞと思った。また、ノウ糸が海中に引っぱられ始めた。

そんなやりとりを一時間くらい続けて、とうとう船近くに引き寄せた。三メートルくらいの大物だろうと想像したが、船べりにはりつけてみると、一メートルくらいの子供だった。さぶろうはへとへとになって船板にすわると、崎原に帰ったときに、じいちゃんに「つびどくしかられるのが頭にうかんだ。」

いきなりほうちょうをにぎるとパシッとノウ糸を切り離した。

「もつとでかくなってから勝負しような。」